

新 聞 資 料

2006年(平成18年)9月14日(木曜日)

14 版

総合 (2)

国立天文台と東大の研究チームが米ハワイ島の大型望遠鏡「すばる」で、天体観測史上、最も遠い銀河の観測に成功した。地球からの距離は約128億8000万光年で、同望遠鏡が持つ記録を約6000万光年上回った。宇宙誕生の仕組みを解明する上で重要な手がかりになると期待されている。14日付の英科学誌「ネイチャー」に掲載される。

一番遠い銀河

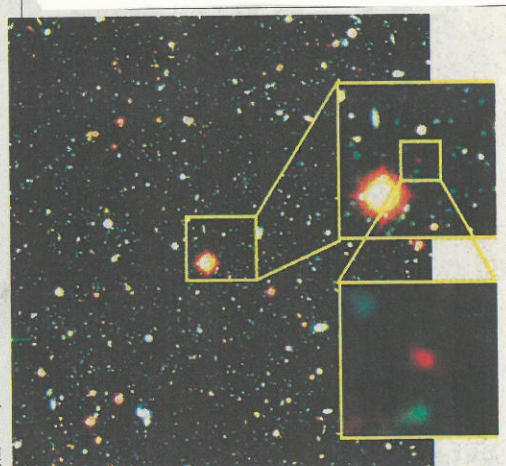
望遠鏡「すばる」観測

研究チームは、すばる望遠鏡に、光の感度を高める特殊な装置(フィルター)を取り付け、かみのけ座の方向を観測。約4万1000個の天体を詳しく分析した結果、光の状態から「IOK-1」と名づけた銀河が最も遠いことを確認した。

地球からの距離が遠くなるほど、光が届くのにかかる時間がかるため、約137億年前と

さされる宇宙誕生から約8億年後の最古の銀河を見ていることになる。

宇宙誕生の直後から数億年間は、水素ガスの厚い雲にさえぎられて、銀河の光は地球まで届かないと考えられている。IOK-1の光が地球に届いたことは、ガス雲が銀河の光で分解され、宇宙が晴れ上がり始めたことを意味するといふ。



すばる望遠鏡がとらえた観測史上では最も遠い銀河。右下の拡大画像の中央に赤くなっている(国立天文台提供)